

評 選 門 部 説 小

選 評

坂 上 弘

受賞作「同調とバランス」は、日本を離れている主人公を暗澹たる思いにおとしれるところからはじまる。高齢で認知症の運転者に自分の姪が轢かれ姪は死んでしまう。主人公はこういう理不尽な暗部にひきずり出され、題名にある同調の生き方をさぐる。そして仲よしだった姪のかわいがっていたロボットの仔犬を育てているうちにバランスをとりもどそうとする。ふと小林秀雄の短篇といえる「人形」を思い浮かべた。ロボットではないが老夫婦の亡き息子がいい人形は、感情も対話も示さない。しかし人形にはロボットにはない人間性がこもっていた。

佳作「逕をゆく」は、江戸白金坂の団子菓子職人の夫婦の終生を描く。夫の孫四郎が亡くなって二年経ち、妻の久仁は約束したとおり、夫の仮墓である墓石にあたる石を抱いて、夫の郷里へ旅準備をする。書き出しの落着きがいい。善光寺に出掛ける講の仲間に入れてもらうなど、江戸時代の善意の社会に感心させられる。この妻の久仁は夫孫四郎の郷里へなんとか辿りつくが、その寺にはあるべき墓が見つからない。しかし久仁の夫を信じる意思はかたく、まっすぐ逕をたどろうとする。江戸時代の、一筋のみちをたどって生きる庶民の人間性におどろかされた。

佳作「春泥」は、お目当ての難関高校の進学に成功した母娘の健康な姿がくっきり浮かぶ。劣等生が主人公に多い世界で、トップクラスの優等生が主人公なのは珍しい。この高校には思いがけず厩舎があり馬術部があってライバルの生徒と馬術をやることになり、春泥にまみれた青春が謳歌される。泥くさい視点も欲しかった。

感 想

佐 伯 一 麦

受賞作「同調とバランス」は、主人公の「僕」が、姪っ子の十九歳のシーちゃんを轢いて死亡させた加害者の息子と焼き鳥屋で酒を飲む、という意外性のある展開にまず引き込まれた。加害者は認知症が進んだ老人であり、その息子も母親を若者の無謀運転で亡くしていた。怒りのやり場が無いやりとりの中で、へただな、何だか空しくてな自分が架空の人間になっちゃったような気がするんだ」と述懐する「僕」は、相手を全否定せずに、現代の微妙な人間関係を掬い取っている。シーちゃんは、生まれてすぐ「僕」があげた犬型ロボットの「ボン」を一生可愛がっていた。それを譲り受けた「僕」と、AIの学習機能を持つ「ボン」の触れ合いを通して、シーちゃんの日常があぶり出されてくる様が巧みに描かれていた。シーちゃんが残したブログの文章は現代的な生彩があるとともに、先の「僕」の述懐とも照応していると感じられた。

佳作の「逕をゆく」は、江戸時代の団子茶屋のおかみの久仁を主人公とした時代小説で、亡き夫の故郷の上州を訪ねる道中の様子や、集団参詣の講の仕組み、無縁となることへの怖れなどが確かな筆致で描かれてあり、旅を同行している思いとなった。故郷に夫がいた形跡がなく、夫婦とは何だろう、と久仁が自問するあたりから小説にふくらみが増した。もう一つの佳作「春泥」は、若者たちを仮想現実が取り巻く現代にあって、馬という野性的なものに惹かれる主人公の向日性が貴重だった。

選 考 を 終 え て

長 野 ま ゆ み

受賞作「同調とバランス」は、一九歳で事故死した姪の遺品として、犬型ロボットを受け取った「僕」のその後を描く。ペットなど飼うヒマも趣味もないビジネスマンが、犬であって犬ではなく、かといってただの機械でもない存在となじんでゆくようすを面白く読ませる。その「犬」はもとと彼が生まれたての姪にあてがったものだ。だから、「犬」は彼女の成長を見届け、時間を共有していた。かくて「僕」は犬型ロボットを通して姪の暮らしぶりを再発見する。一歩間違えれば邪な視線になりそうな設定を軽妙な文体で巧みにかわす。後半、姪が秘かに記した日記風のブログが見つかる。このブログの語り口が本作の魅力を決定づけた。ロボット犬がメディアとして機能する点をうまく描いている。佳作の「逕をゆく」は江戸後期の町民の旅を描く。主人公は夫を亡くして二年になる久仁。夫の故郷を訪ね、そこに墓を建てるための旅である。国境が厳密に人と物を検分し、越えるにはいちいち書き付け(伝票)を必要とする。今も変わらない物流の原点は商業が発達し商人が栄えた江戸期に洗練されたことを思いつつ読んだ。時代考証が正しいのか否か私には判定できないが、そんなことを気にせず丁寧に読ませる筆力がある。久仁は亭主の故郷へたどりつくも、そこに亡き人を知る者はなく、痕跡もない。嘘だったのだ。しかし久仁は夫を恨みはしない。かえって自らの女房としてのいたらなさを悔い、そのせいで夫は真実を語れなかったのだと思ひやる。そんな濃やかな描写で和ませる。「春泥」はいつの時代も変わらない若者の自分探したが、馬術という道具だてに個性があった。